

天皇と歴史

●『天皇(125代)の歴史』(山本博文/監修、西東社、2018年、所蔵:江古田)



南北朝時代の北朝天皇5人を含めた、125代130人の天皇すべてを概観できる書。オールカラーの図版と写真が豊富で、天皇の歴史をやさしく学ぶことができる。歴史だけでなく、現在の天皇や皇室、儀礼が図解でまとめられており、予備知識なしでその起源や伝統もおさえられる。まさにこれから天皇について調べてみようか、と考えている人にオススメだ。

●『天皇はなぜ滅びないのか』(長山靖生/著、新潮選書、2011年、所蔵:中央)



天皇は日本の歴史において重要な意味を持つ存在だ。「天皇は万世一系」とされ、

●『天皇の音楽史』(豊永聡美/著、吉川弘文館、2017年、所蔵:中央)



毎年皇居で行われる「歌会始」と同じように、かつては天皇主催の管弦楽会、「御楽始」があった。しかし1869(明治2)年を最後に、現在は行われてない。近世まで、天皇は帝王学の一つとして代々管弦楽器を演奏してきた。天皇自ら楽器を演奏し、宮廷音楽をリードすることとは、権威を構成する重要な要素だったのである。そうした音楽と天皇の権威との関わりについて、古代、中世の天皇の音楽を紹介しつつ明らかにする。

現代の天皇と皇位継承

●『天皇皇后両陛下とともに歩まれた60年』(宮内庁侍従職/監修、クレヴィス、2019年、所蔵:鷺宮、東中野)



現代においても、天皇は被災地やかつての戦地で歌を詠むことがある。天皇は万葉集編纂時代より代々和歌をたしなんでおり、毎年1月に皇居で催される「歌会始」は鎌倉時代から70年以上もの歴史をもつ。本書では和歌を通し、天皇が日本社会においてどのような存在であったかを考察する。新元号「令和」が万葉集の序文を由来としていると話題の今、和歌から天皇を紐解いてみるのも面白い。

今まで何度か存続の窮地に立たされたながらも、一度も滅ぼされたことはない。それは、日本人にとって天皇が憧れの対象であり、一種のブランドイメージを持つに至ったからだという。その起源を主に近世に遡り考察。天皇の歴史から、日本人の本質を探る一冊。

●『上皇の日本史』(本郷和人/著、中央公論新社、2018年、所蔵:野方、上高田)

「上皇」とは、譲位後の天皇の尊称であり、太上天皇ともいう。外国では、退位した君主に対する特別な呼び名はない。上皇は日本独自の制度であり、ときに「院政」として、天皇の地位を退いた後も政治の実権を握ってきた。1817(文化14)年に上皇となった光格天皇以来、約200年ぶりに新たな上皇が誕生した今、その歴史にスポットを当てた本書で、現代の上皇の在り方について学んでみよう。

●『象徴天皇制の成立』(茶谷誠一/著、NHK出版、2017年、所蔵:野方)



「日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」と戦後の日本国憲法に規定された天皇の在り方。天皇はいかにして戦前の

上皇陛下・上皇后陛下御成婚60年を記念し、宮内庁侍従職が監修した写真集。御結婚時の写真はもちろん、家族と趣味を楽しむ姿、国内外様々な場所に訪問し現地の人々と交流する様子など、60年の足跡を上皇陛下の言葉と共に辿る。国民の安寧と幸せを祈り続けた両陛下の歩みを、オールカラーの写真で振り返る。

●『象徴天皇の旅』(井上亮/著、平凡社、2018年、所蔵:中央)

上皇陛下は天皇に即位後、全都道府県を二巡し、36の国へ訪問した。自らの足で世界を見、人々と触れ合うことで、象徴天皇としての役割を果たしてきた平成の天皇。その旅は時に折り、和解、慰霊など様々な意味を持ち、明仁上皇にとって国民を理解し、寄り添う為に必須のものであった。上皇の旅を通して、国民の象徴としての天皇について考える。

●『皇位継承増補改訂版』(高橋紘/所蔵:中央)

今、皇位継承は危機を迎えつつある。皇位は男系男子のみ継承が認められているが、現在皇位継承有資格者は三人まで減り、その存続が危ぶまれている。さらに、近代で先例のない「高齢譲位」による代替わりが今月頭に行われたばかりだ。皇室の伝統が揺らぎ、皇位継承に関心が高まる中、その歴史と課題、そして未来を論じる。「皇室典範特例法」の成立、代替わりの儀式についても網羅した一冊。

「統治権の総攬者」から、国政へ関与できない「象徴君主」へ変化したのか。敗戦直後から占領時代にかけて、天皇や宮中、政府、GHQ間の複雑な力関係と応酬の中で象徴天皇制が成立する過程を追う。膨大な資料を読み解きながら、象徴天皇制とは何なのか、その過去と未来について考えさせられる。

天皇と文化

●『図説天皇家のしきたり案内』(「皇室の20世紀」編集部/編、小学館、2011年、所蔵:中央)



日本の伝統と文化の象徴である天皇とそれを支える皇室における文化やしきたりについて理解できる本。正月行事や御膳、ご誕生の儀式、宮廷装束など、知られざる宮中祭祀を50点に及ぶカラー図版と写真で紹介する。皇室文化の用語解説も収録し、日本ならではの皇室文化がよくわかる一冊になっている。

「天皇」という日本独自の存在を学ぶことは、すなわち日本の歴史や文化を学ぶことであり、日本という国をより深く理解するための一つの入り口でもある。新天皇の即位に伴い、天皇制の未来、ひいては日本の未来について考えた人もいると思う。新しい時代を作るのは、今を生きる私たちである。今回の歴史的出来事は、各々日本という国を見つめ直すきっかけになったのではないだろうか。中野区立図書館では、紹介した本以外にも、天皇に関する資料を多数所蔵している。改元を機に、図書館への新たな一歩を踏み出していただければ幸いだ。

参考文献

- 『天皇の日本史』 洋泉社、2019年、所蔵:中央
- 『知識ゼロからの天皇の日本史』 山本博文/著、幻冬舎、2019年、所蔵:南台
- 『日本人なら知っておきたい皇室』 松崎敏弥/著、河出書房新社、2012年、所蔵:中央
- 『天皇・天皇制をよむ』 歴史科学協議会/編、東京大学出版会、2008年、所蔵:中央・南台・鷺宮

今こそ知りたい 天皇・皇室のこと。



●『天皇と和歌』(鈴木健一/著、講談社、2017年、所蔵:中央)



現代においても、天皇は被災地やかつての戦地で歌を詠むことがある。天皇は万葉集編纂時代より代々和歌をたしなんでおり、毎年1月に皇居で催される「歌会始」は鎌倉時代から70年以上もの歴史をもつ。本書では和歌を通し、天皇が日本社会においてどのような存在であったかを考察する。新元号「令和」が万葉集の序文を由来としていると話題の今、和歌から天皇を紐解いてみるのも面白い。